

松武 秀樹（まつたけ・ひでき）先生

シンセサイザープログラマー
一般社団法人演奏家権利処理合同機構MPN 副理事長

1951年、横浜生まれ。1970年の大阪万博アメリカ館で、シンセサイザーとコンピュータを組み合わせ演奏されていた「スイッチド・オン・バッハ」を聴き、新しいフィールドに大いなる興味と関心を抱く。20歳から富田勲氏のアシスタントとして、当時日本には数台しかなかった“モーグ・シンセサイザー”による音楽制作のスタッフを経験。独立後もシンセサイザー・ミュージックの可能性を追求、モーグ・シンセサイザー・プログラマーの第一人者としてロック、ポップス、CM音楽のレコーディングに参加する。1978年、矢野顕子のアルバム『トキメキ』のニューヨーク・レコーディングにおいてデジタル・シーケンサーを使用。坂本龍一のソロ第1作『千のナイフ』への参加をきっかけに、1978年～1982年にかけて、サウンド・プログラマーとしてYMO作品に参加し、数々の伝説的なレコーディングを経験。また、ワールド・ツアーを含めたYMOライブにも帯同。通称“タンス・シンセ”と呼ばれる巨大シンセを操りながら世界に大きな衝撃を与え、「YMO第4のメンバー」と称される。1981年には自身のユニットであるLOGIC SYSTEMを結成し、現在までに15枚のアルバムを発表。その内の2枚は世界8ヶ国でリリースされ、各地に熱狂的なファンを生み出した。2011年に入り、再びLOGIC SYSTEMの活動が活発化。DJ HARVEYを筆頭に豪華リミキサー陣が参加したEPシリーズ第1弾『RMXROGIX』のリリースに合わせて、エレクトロニック・ミュージックにフォーカスを当てた新レーベル〈MOTION±(モーション・プラス/マイナス)〉を始動させる。5月の“FREAKS MUSIC FESTIVAL”、6月にUNITで行われたライブ・イベント“SPECTACLE”では会場を大いに沸かせ、アナログ・シンセのブツ太いサウンドでオーディエンスの体を見事に揺らし続けた。



《講義概要》

一般社団法人演奏家権利処理合同機構MPNの副理事長であり、モーグ・シンセサイザー・プログラマーの第一人者として活躍している松武秀樹氏が、「テクノポップ&ビジネスモデル 2013」をテーマに講義を行った。

講義ではまず、日本や欧米におけるテクノポップの歴史について詳しく解説し、テクノロジーの進化が新しい音楽を生み、音楽文化・産業の発展に大きな影響を与えたことを示した。

続いて、ミュージックビジネスのモデルと課題について法律の見地から解説。CDの売上げが低迷する中、CDに代わるサービスとして注目されている放送局の「ウェブキャスト」について紹介するとともに、商業用レコードの利用態様に関わる日本法と国際条約との比較を示し、日本においてサービスを発展させるには著作権に関わる日本独特の問題を解決しない限り難しい現状を示した。また、音楽の標本化の新しい規格として登場したハイリゾリューション音源について説明し、その魅力と高品位なコンテンツの提供への可能性について言及。

「演奏している情熱が空気振動で伝わって聴ける」ような技術が今後求められていると伝えた。最後には、今後のミュージックビジネスの発展について、音楽を聴く環境に合ったサービスの構築の必要性やアナログとデジタルの融合が不可欠であることなど重要なポイントを提示し、音楽文化・産業の今後の更なる展開と可能性について考える機会を与えた。

《受講生の感想》

●様々なものがデジタル化し、便利になる一方で、無機質になってしまうのではと思っていたが、時代に沿った音楽を追求する事も大切だと思った。また、ハイリゾリューション音源の話聞いたが、いい音を追求する人々の思いが音楽の技術の発展に繋がったのだと思う。アナログとデジタルを融合させることは音楽の発達、そしてその他様々なことにも通じるのだと思う。
立命館大学・産業社会学部・3回生

●これからの音楽業界がどうなっていくか、その展望を細かく説明していただき、大変興味深かったです。自分も興味がありハイレゾ音源の流行を感じていて、流行するのも納得という印象を受けました。これからの移り変わりにより敏感でいたいと思わされる 90 分間でした。
立命館大学・映像学部・2回生

●テクノポップについて様々な歴史を知ることができて勉強になった。テクノポップが流行したのは、デジタル機器が開発されたからであり、デジタル機器の開発は、音楽において大きな開発だと思った。また、ビジネスモデルについてウェブキャストサービスは問題点もあるようだが、たくさんの人にとってとても需要はあると思うので、問題点も直しながら発展して欲しいと思う。
立命館大学・産業社会学部・3回生

●放送と通信においては、著作権のみならず送信可能化権や許諾権、報酬請求権などの様々な権利が取り巻いています。きちんと音楽が保護されつつも、良い音楽・新しい音楽が世に広まるような法律、制度作りを行うべきだと思います。立命館大学・法学部・3回生

●ラジオも発達しており、クラウドで繋がり、リスナーが好きな曲、好きそうな曲を自動的に選択され、組み立てられることは画期的なことだと感じた。これからの日本のラジオの変化について注目していきたいと思った。ここ数年で一気にデジタル化が進んだが、アナログの重要性も再認識されてきている。これからの音楽はアナログとデジタルの融合が必要だと感じた。
立命館大学・産業社会学部・2回生

●音楽ビジネスは昔は複製された音源（CD など）を通して音楽をより身近なものにしようと考えられていたが、今日では音楽をただ届けるだけでなく音楽としての質であったり新たな視線から音楽を考えていくことが必要になってくるのではないかと今日の講義を通して思いました。「音を創る」「良い音」など今まで私が生きてきて接することのできない音楽の世界を知ることができました。これからまた違った視点で音楽を捉えていきたいと思います。
立命館大学・産業社会学部・2回生

